

# 新潟市美術館

平成22年度資格取得

児矢野 あゆみ

## はじめに

私は美学美術史学科で西洋美術史を中心に学び、他大学院へ進学。16世紀イタリア美術について研究しました。その後、研究生として研究を続ける一方で、美術館で普及活動に従事するインターンシップに参加し、同時期に学芸補助のアルバイトを行い、神奈川県立近代美術館の非常勤学芸員の経験を経て、2017年に新潟市美術館の学芸員に採用されました。学部生の頃は、画廊やアートフェスティバルのボランティアに携わりましたが、「作品」を所蔵し、研究し、展示することで、その土地が培ってきた美術文化を守り、後世へと継承していく美術館での仕事に対して強い憧れを抱いていました。

## 新潟市美術館について

私が勤務する新潟市美術館は、1985年に開館して以来、新潟出身の作家を中心としながら、近現代の国内・国外作家の作品を収集し、所蔵作品は約4800点を数えます。前川國男晩年の建築としても有名です。運営方針に、1.発見する美術館 2.学べる美

術館 3.生きている美術館 4.つながる美術館 5.信頼の美術館 を掲げて、作品の収集・保管・調査研究・展示・普及活動を行っています。

## 保存環境

美術館業務において重要な仕事のひとつに、文化財IPM（Integrated Pest Management 総合的病害虫管理）の取り組みが挙げられます。基本的なことですが、館内を清潔に保つなど日常的な管理を徹底することで、虫や菌の発生を防ぎ、作品や展示室を守ります。季節・館内の環境の変化・人の出入りなどを注視し、予防することで作品への影響を最小限に抑えます。作品にとってベストな環境を整えるために、温湿度管理をしている空調の整備士と話し合い、専門家の意見を伺いながら日々努力を重ねています。

## 展覧会業務

### ・常設展「まる、はじまりのかたち」

常設展では、当館所蔵のコレクションを紹介しています。当館では、担当が一人で企画・展示作業・ギャラリートークまでをこなすので、学芸員の個性が強く出ているように思います。私が初めて企画したこの展覧会は、地元作家の猪爪彦一先生による《祖父のたまご》を中心に、単純でありながら多義的な「まる」の造形を追求しました。

展覧会の内容が定まり出品作品を決めていく過程で、作品調査カードをもとに収蔵庫で作品の状態を確認します。必要があれば額装や修復を依頼します。



新潟市美術館外観 撮影：今井智巳

## 卒業生による活動報告

イラストレータで展示プランをつくり、大きさが想定できない場合には立面図を作成します。隣合う作品同士の相性（造形、色合い、作家、時代）を考慮し、かつ見栄えというものを意識して、空間を作り上げていくのです。図面のうえでどれだけ思案しても、展示室では予想通りにいかないのが、展示の面白いところです。収蔵庫から展示室へ展示予定の作品約50点を移動し、開梱と作品点検をしながら位置決めをしていきます。作品が美しく見えるように…しかしながら展覧会の文脈から外れてしまわないように、館長からも意見を伺いながらの展示作業となりました。

最後の仕上げは照明です。私は一時期、美術照明の専門家のもとで、アルバイトをしていました。作品はどんな場所で、どんな光のもとで描かれたのか？そのとき、作家が作品を見つめ手を止めたときの光に思いを馳せます。その時に、アルバイト先の方から言われた次のような言葉が胸に残っています。「照明は作品の魅力を最大限に引き出すだけで、作品を演出するものではありません」。学芸員は、展示という操作によって作品を活かすことを目標としますが、反対に、過剰に演出してしまうときがあります。内容はもちろんのこと、展示を行う際にはいつでも謙虚な気持ちでいなければならないと、肝に銘じています。

### ・企画展「フランス国立図書館版画コレクション ピカソ 版画をめぐる冒険」

企画展は「自主企画展」と「巡回展」に大きく分けることができます。今回担当させて頂いた展覧会は、企画会社による巡回展です。出品作品や内容がほぼ固まっているので、学芸員にとって比較的負担の少ないタイプの展覧会です。まずはじめに、フランス国立図書館の学芸員が事前の下見のため来館し、展示室や壁面のコンディションを細かくチェックしていきます。この時に、展示プランについても意見を頂き開催直前までやりとりが重ねられました。

この展覧会で大変だったのは著作権の処理です。ピカソの著作権は保護期間内にあり、広報物の制作や雑誌・新聞への掲載に際して細心の注意を払いました。また、本展は地元のテレビ局と「実行委員会」を組んで開催したので、テレビ局の方と広報について話し合いを重ねました。グッズについてはミュージアムショップと、予算の執行や契約については総務係の助けを得て成立させていきます。

展覧会は、学芸員ひとりの力で成し得るものではありません。展示台やパネルの制作、会場設営は専門の業者に依頼します。実際に展示に入れば、作品点検をのぞき、作品は展示作業員の手によって配置



コレクション展Ⅰ「まる、はじまりのかたち」



常設展示作業



常設展示照明作業

され、壁に掛けられます。学芸員とは、いわば総監督のような存在です。その内容や作品についての理解を深めるなかで、開催に向けて様々な業務をまとめていきます。展覧会終了後は作品を次の会場へ、あるいは所蔵元に返却することで、無事に展覧会を終えるのです。

### 普及活動

私はインターンから非常勤学芸員まで主に普及活動に携わってきました。主に、子ども向けの鑑賞とワークショップを組み合わせたプログラムの企画・実施です。その経験を活かして、現在も子ども向けの講座や、学校連携事業「アートリップ」に携わっています。

#### ・アートリップについて

当館では、学校教育との連携を深め、子どもたちが美術に触れる機会を積極的に設け、想像力と感受性を養うことを目指し、こうした事業を行っています。事前出張授業と来館授業でワンセット。事前授業では、パワーポイントや、作品をハガキ大に印刷したアートカードなどを用いたゲームを通して作品と親しみます。来館した時に、本物の作品と出会い、鑑賞の喜びや楽しさを知ってもらうのです。現在、学校の教育指針では「鑑賞教育」が強く推奨されていますが、学校の先生方の中には、どのように授業に活かしていけばよいのか悩んでいる方が少なからずいらっしゃいます。指導目標や授業のねらいに応じて、話し合いながらオーダーメイドの鑑賞授業を協働して行います。

この際によく用いるのが「対話型鑑賞」です。複数人で作品を鑑賞し、それぞれが発見したことを言葉にし、様々な意見を周囲と共有することで、ひとつの作品について深く語り合うものです。作品には鑑賞者の数だけ見方が存在します。その見方を共有することで視野は広がります。こうして培われた観察力や、考え聞く力は、日常における様々な「気付き」となり、その子の人生をより豊かにするのではないのでしょうか。

この活動を通して、私は美学美術史学科で学び得たものを活かしていると実感しています。ゼミでは、何よりも「ディスクリプション」の大切さを学びました。描かれているものを具体的に的確に言語化する

ことで、私達はようやく本当に作品を「観る」ことができます。その経験が、子どもたちに様々な視点から作品をみるヒントを与える力に繋がっています。

### まとめ

多岐に渡る業務のうち、私が携わるその一端をご紹介させて頂きました。美術館を取り巻く環境は厳しいと感じています。近年は予算の削減や指定管理者制度の導入により、作品の安全が守られない事例を耳にすることもあります。収入を重視するために「人が来る」展覧会ばかりを優先し、人が入りにくいけれど文化的・歴史的に重要な展覧会の開催が難しいときもしばしばです。しかし、それを悲観し甘んじて受け入れるのではなく、バランスを取りながら運営していく努力の必要性を感じています。美術館により事情は様々ですが、守り伝えるべき作品たちを中心に考え、改めて美術館や学芸員が社会に存在する意味を見つめ直すべきときがきているのかもしれない。

学芸員にとって必要なことは、常に様々なモノやコトにアンテナを張り、興味関心を持って接する姿勢です。最先端の美術史研究や、展覧会の流れを追いつながら、文化政策の動きにも敏感でなくてはならないと思います。学芸員はひとりでは無力ですが、作家や作品、各分野の専門家、ときにはボランティアの力を大いにかりて、美術館を運営しています。その指針を見極め、作品を後世へと伝えるために今何をすべきか。試行錯誤しながらも日々精進していきたいと考えています。



アートリップの様子